

アジア舞台芸術祭

参加者インタビュー#06

鈴木智香子さん（イ・ソング（韓国）チーム／俳優）

韓国の演出家、イ・ソング氏のチームに俳優として参加した鈴木さん。劇団「青年団」に所属し、これまでも国際共同制作の現場に携わることは多かったといいます。

自身が初めて国際共同制作に正面から取り組んだのは**2008**年。フランス人の演出家と日本人の**3**名で、京都での**10**日間のアーティスト・イン・レジデンスを経験。ドラマ・リーディングからフル・スケールへと成長させた作品を**2009**年、**2012**年に東京、京都、アヴィニョンなどで上演しました。

「大変な部分もたくさんありましたが、すごく刺激的な体験でした。それ以来、国際共同制作の場をまた経験したいと強く思っていました」

また劇団の公演でも、俳優として中国・韓国・タイ・マレーシア・インドネシアを巡る東南アジア・ツアーを経験。言葉は全く違うものの、食べ物や日本人に近い体つきにも親しみを感じたといいます。

ところが上演中、特に“笑える”わけではないシーンで観客席から笑いが。

「どうやら日本人が出てきて話をしている、ということ自体が面白かったらしいんです。そのとき、アジア人である自分と彼らは近い存在だと思っていたけどもしかしたらすごく遠いのかもかもしれない、と。

今回参加することで、あの体験をもっと理解できるんじゃないかとも思いました

「かなり濃密なコミュニケーションがあった」という今回のワークショップ。イ氏が決めた韓国の伝統的な祭祀（チェサ）というモチーフと「息子とすでに死んでしまった母親」という状況設定を元に、どういったエピソードやシーン

があり得るか、死に対するイメージの文化的な違いなど、全員でひたすら議論を重ねて作り上げていきました。

韓国人の演出家と、俳優は全員日本人のチーム。セリフは、役者が演じながら即興で話した言葉を、演出助手が書き起こすという方法で立ち上げました。ところが翌日からは、せりふがどんどん削られていったといいます。“その前後に話していた言葉は聞いていると思って、一言に凝縮して“といった指示でとにかくシンプルに。

「私は母親役だったので、韓国語で息子に「愛してるよ」と言う練習をしたこともあったんです。ところが言えるようになった翌日にカット。“同じ気持ちで息子を見て笑って”と指示されました。つまり言葉としてはなくなっても、思いや感情はカットされていない。“これは今いい作業をしているな”と思いました」

また演技をする上での身体的な所作についても、かなり具体的な発見がありました。日本の演劇では決して珍しくない、役者が静止していたり、無言でいたりする演技について、イ氏からは「動いて」という指示が。

「自分としては、動きは止まっても内面ではものすごく動いているし、その時間だけ動きが止まるということに意味があると考えているのですが、演出家からは“もっとアウトプットしてほしい”と何度もリクエストされました。今まで私が観た韓国の作品がすごく躍動的で、エネルギーが強いと感じていたのは、そうした違いにもよるのかもしれませんが。この短期間で、そこまで突っ込んで話せたのは貴重でした」

本番ギリギリまで作りこんでいった作品は“まだ出来るかも”という状態で初日を迎えました。「それまでの蓄積が濃厚だったので、それを信じてやれた。初日にはお客さんと一緒に最高の状態を体験できました」。1日目、2日目と回を重ねて良くなっていき、他チームの参加者からは「涙が止まらなかった。10分間の作品でこんなに感動できるのか」という声も。

以前のフランス人演出家との共同制作では、「向こうから受け取るものに集中していた」という鈴木さん。今回は「自分は何を提示できるのか」という姿勢で演出家との共同作業ができたと振り返ります。

「これまでに蓄積され自分という俳優を形成しているもの、自分はどのような俳優なのかということ、説明できるに越したことはない。

（国際共同制作における演出家との）一方通行じゃなく、双方向な関わり方を今回の経験で見つけたと思います」